

役場の対人援助論

(3 6)

岡崎 正明

(広島市)

それでも 私たちは 助けあうこと やめない

仕事をしていると ときどき

澱のような ドロドロとしたものが たまる

やってもやっても 改善しない事態

話しても話しても 分かってくれない相手

同じようなことをくりかえし 現実に目を背け 楽な方に流れる人々

救うはずの制度や機関は 融通がきかず

互いの無理解を あげつらい

人手が足りない現場は

自己防衛と グチが充満し

理想的なスローガンは

政治家の口から 空虚に飛んで

上からは

先送りと忖度の 風が吹く

そしてなにより

そんな風に思う 己の独りよがり

うんざりする

あれは 私。

楽な方に流れるのも 自己防衛ばかりなもの

みんな 私のことだ

「ひとりも取り残さない社会」なんて無理

「わがごと丸ごと」 そんなのできるはずがない

ろくでもない現実に ろくでもない自分

ドロドロとしたものが

私の中から

とめどなく

あふれてくる

でも

それでも。

そんなときこそ

思うのだ

「それでも 私たちは 助けあうことを やめない」

この言葉だけは 理想的なくせに

ずっと営まれてきた まぎれもない 事実

私たちが まだ狩りと採集で くらしていた頃

気候変動で 食料は減り 人類は滅亡の危機にみまわれた

その時 私たちの祖先は 生み出したのだ

より強い者だけが 生き残るのではなく

弱き仲間を救うことで ともに生き残るという 戦略を

それから どんなに時が流れても

私たちは 助けあうことを やめないでいる

見ず知らずの相手に 募金をし

無償で 海岸のゴミを拾い

老人は 隣家に とれた野菜を分け

若者は 奨学金で 進学して

消防団は 被災地で 汗を流す

ユニバーサルデザイン

炊き出し

介護保険

ユニセフ

新旧東西 規模もやり方も 言語も宗教も肌の色もちがうけれど

私たちは 助けあうことを やめた歴史を持たない

だからときどき 出てくる

自分の国が 1番だとほえる 大統領や

生産性のない者は 殺した方がみんなのためだ とかいう若者に

言ってあげたくなるのだ

わるいけど

それでも 私たちは 助けあうことを やめないよ

それが 私たちの 本性だよって

「それでも 私たちは 助けあうことを やめない」

心の中で そうつぶやくと

あのドロドロが 溶けていくのが わかる

戦争も 差別も

格差も いじめも 虐待も

たぶん そうそうなくなるだろうし

犯罪者も ネットで誹謗中傷する人も 自殺者も

いなくはない

それでも

それでも。

バカのひとつおぼえみたいに

どうしようもないくらいに

自然にくりかえす 私たちの 営み

「それでも 私たちは 助けあうこと やめない」

「それでも 私たちは 助けあうこと やめない」